東日本大震災復興支援情報

●日本人として忘れてはならない心象

小松健一（埼玉県）

宮古市の巨大な堤防近くの市立保育園で。被災した園内に千羽鶴が手向けてあった

東日本大震災直前まで、岩手県内を取材していた。

昨年から４度、のべ30日間程、今回被災した地などを巡っていたのだ。

東北地方は、ここ30数年にわたって「日本文学風土記」の取材で歩いていた。僕にとっては第二の故郷のような愛着のある土地である。すぐに友人たちと連絡を取ったがなかなか繋がらず、全員の無事が確認されるまで一週間かかった。

カメラを担いで取材へ行くべきかどうか、黙々とした日々を送った。「取材へ行ってほしい」と声もかかったが、足を前に踏み出すことができなかった。

それは自分自身の中に馴れ親しんできた町並みや市場や酒場や宿屋……そしてそこに働いていた人や出合った人々のことを思うと気が重くなり、すぐに行動には移せなかったのである。無論カメラを向けることなどできるはずもなかった。

半年がたった９月になってようやく行く決心がついた。一人で盛岡から北上山地を越え宮古市へ車を走らせた。田老地区をはじめ、市内を巡っているうちに、これは何か、いままで見ていたマスコミで報道されている光景とは違うと感じたのだ。

僕は持っていた一台のカメラで、合掌しながら静かにシャッターを切った……。

●もうひとつの想い

小松　稔（東京都）

10月中旬、東日本大震災をモチーフにした「MIND」というタイトルで個展を開いた。

十数年前から「退廃」や「風化」といったテーマで制作してきた私にとって、震災が起こったことでとても制作しにくい事態となり一時足踏み状態が続いたが、悩んだ末「正面から向かい合う」という結論に達し、取材を決意したのである。しかし制作当初、被災地をモチーフに選んだ事を悩み、会期が近づくにつれ、その悩みは雪だるまの様に大きくなっていった。そして自己嫌悪に陥っていく。

災害時の取材に対し、言葉は悪いが、火事場泥棒的な想いを自分の中で膨らませていたのだ。もはや「仕事」、「義務」、「権利」などという言葉を隠れ蓑には出来ない切迫感の中で会期を迎えたのである。会期が過ぎてからもその是非に答えは出ない。今はその現実におこった事が記憶の中で薄れぬ様、少しでも永く表現して行きたいと考えている。一日もはやい被災地の復興を心よりお祈りいたします。

●「避難所最後の日」

松原　豊（三重県）

2011年８月９日。私は「震災後をこの目で確かめてみたい」という衝動から、お盆にさしかかる時期に東北道を一路北へ、車で被災地に向かった。一人の個人として現地を訪れる限られた時間の中で、できるだけ細やかな撮影記録をするため、自

分なりに方針を立てて岩手県大槌町を訪れることにした。

ぽつんと建っている焼け残った家、墓石の無いお墓、屋根瓦だけ無くなった土蔵、ダンプカーが巻き上げる土埃の舞う道。見たことも無い光景が土埃のにおいの中に広がっていた。

窓ガラスが割れ、焼け焦げた３階建ての建物を見つめながら「この建物を覆うような津波が目の前に来たら生きていることは不可能」そう感じたことを今でも鮮明に思い出す。現地を訪れることで、今回の震災の大きさの尺度を自分自身にインプットすることができたのだと思う。

役場近くの避難所である体育館には、最後に一人残ったＩさんが見えた。沢山の避難者が居たであろう場所で、ぽつんと一人のところを撮影させてもらった。これから移るという仮設住宅も一緒に見に行った。

「ふるさと」という言葉について今年ほど考えたことはない。還る場所を「ふるさと」とするなら、3.11はそれが喪失する様を沢山の犠牲者の方を巻き込みながら私たちに見せつけたのだ。

この原稿を書いている時点で震災から９カ月を経過した。私は自分の住んでいるこの地で「ふるさとは何か？」を念頭において今回の震災のことを引き続き考えてゆきたいと思う。そして震災から１年が経過する前の2012年の冬、もう一度岩手県大槌町を訪れる予定だ。仮設住宅に住むＩさんに会いに行くために。

●「笑いの療法士」赤川浄友僧侶の話術！

北川孝次（大阪府）

福島第一原発事故のため、半径20㎞圏内に住む人々が避難されている福島県の楢葉町、富岡町、広野町に建てられた仮設住宅に、震災直後の３月31日から51回も講演をされている「笑いの療法士」赤川浄友僧侶とご一緒に回る。

僧侶のユーモア溢れる法話に会場が和み、私は「世界の子供たちの笑顔」のスライドと講演で、ひとときの安らぎを感じてもらった。

その後、津波被害が大きかった釜石、陸前高田、気仙沼、石巻、を訪ね、又、私個人でも秋田、山形へスライドと講演のため訪問した。

被災から８カ月たった現在、不自由な生活を強いられている現状にありながら、笑顔で迎えてくださった方々に心から敬意を表します。

映写用スクリーン、スピーカー、プロジェクター等を積んでの車移動でしたが、被災地で出逢った笑顔に元気をもらった。

●浜口タカシが見た！被災地の惨状

浜口タカシ（神奈川県）

がれきの上に泳ぐ鯉のぼり

東日本大震災の記録を、2011年６月から９月まで４回計11日間、東北被災地を撮影取材した。

大津波で街が壊滅的で跡形もない。岩手、宮城、福島の３県と地面が液状化した千葉県浦安市など全行程1,200キロに及ぶ取材を行った。

このたびの東日本大震災はM9.0の大地震で、千年に一度と言われる大津波は想像を絶し、町や漁港などは壊滅的状態であった。特に印象に残ったのは、気仙沼で大津波で押し上げられた大型漁船が折り重なっていた事。陸前高田は一軒もない殺伐とした爪痕であった。南三陸町、女川町、石巻市などは戦後の焼け野原のようであった。希望を願う大漁旗、がれきの上に天高く泳ぐ鯉のぼりを見た瞬間、がんばろう東北と心の底から叫んだ。東松島の仮埋葬地の墓標に、身元不明者の番号が付けられていた。心の底で泣いた。畏敬の念を抱きながらシャッターを切った。

復旧復興は迅速に。農林水産漁業問題、医療、介護、雇用、教育、放射能による除染など問題は山積している。迅速に対策を実行すべきである。特に福島原発事故は一日も早く終息すべきである。

「東日本大震災復興支援情報」の掲載記事を募集しています。 文字450字と写真１枚を総務までお寄せ下さい。